

生命科学研究科における外部評価について

本研究科では、研究科の自己点検・評価とともに、第1期中期目標・中期計画に対する業務の実績調査、大学機関別認証評価のための資料として自己点検・評価報告書を2007年5月に取りまとめました。同資料ならびに、2008年度に取りまとめた「研究科の教育・研究に関する現況調査」、「各分野における教育研究成果等のとりまとめ資料」等をもとに外部評価委員4名による書面評価を実施しました。

その結果、教育、研究、組織運営、研究科を構成する分野の教育研究活動に関して、以下に示すような高い評価をうけますとともに、今後の課題も指摘されました。指摘された点につきましては謙虚に受け止め、第2期中期目標・計画に反映していく予定です。

以下、外部評価の概要を記します。

2009年4月22日

生命科学研究科自己点検評価委員会

教育に関する外部評価の概要

学生の高い潜在的能力を引き出すべく、大学院教育の充実に多大な努力が払われており、高く評価される。すなわち、「21世紀COE」や魅力ある大学院教育イニシアティブ「生命科学キャリアディベロップメント」により、大学院講義を見直し、その充実に努めてきた。学生へのアンケート調査でも、大部分の学生が満足している。修士課程では、幅広い生命科学の諸分野や周辺領域を体系的に理解することを目的に、生命科学と社会との接点や研究成果を社会に還元し共有する方法に関する講義を充実させた。博士課程では、最先端の生命科学を学び、多様な進路を知り、研究成果の社会と共有する方法論を学び、実践的な英語コミュニケーションスキルを学ぶようにカリキュラム講義を充実させた。複数指導教員制による進路指導、学生主催の研究発表会による人的交流と視野の拡大、社会で先輩が活躍する現場を目の当たりにするサイトビジット、若手研究者の特任助教への採択を実施していることも評価に値する。

研究に関する外部評価の概要

当研究科の21世紀の生命科学を強く意識した研究活動は、それぞれの分野における成果から見て質および量的に極めて高いものが多く、なかにはホールマーク的、新しいパラダイム創成につながるような研究成果も出てきており、十分に評価される。研究内容は、理学・農学・薬学・医学に至る幅の広がりがあり、それぞれの研究分野およびその学会でのリーダー的陣容を擁していることは特筆すべきである。これは、当研究科において自重自敬をモットーとした多様的で自由な発想を可能とする環境があるということと、教員スタッフにその発想に基づいて研究を遂行できる高い能力を有する人が多いということによるものと見受けられる。その一つの指標としての獲得外部資金も、潤沢である。

組織運営について外部評価の概要

生命科学の大きな発展の流れを受けて、医学部、理学部、農学部、薬学部から生命科学の先端的研究グループを結集し、統合および高次生命科学の発展を図る生命科学研究科が設立されたことは明治以来の硬直的な学部教育を基盤としている大学に人の理解に向けての統合的な取り組みを迫る可能性を開いたものとして高く評価したい。設立後も、コミュニケーションと生命倫理に取り組む生命文化講座を設け、協力講座や連携講座の拡充により、生命科学を幅広くまた統合的に教育・研究する体制を整えてきたことも評価される。一方、このような組織の充実と拡大により、各研究者の個別的な研究から一步進んだ統合生命科学への進展に向けて一層の努力が望まれる。

研究科を構成する分野の教育研究活動についての外部評価の概要

ヒトをはじめとする高等生物の総合的な理解が可能となり、統合的な生命科学研究が大きく進展している中で、医学部、理学部、農学部、薬学部の研究グループを結集して生命科学研究科を形成し、統合生命科学と高次生命科学の構成で多様な生命科学の教育と研究に対応していることは大きく評価される。多くの研究室は高いアクティビティを示しており、これからの発展を目指す若い研究室も包含しており将来性も期待出来る。一方、優れた研究室や潜在能力の高い研究室の単なる集合体から先端的な生命科学グループを糾合したことによる新たな生命科学の地平が明確なメッセージとして表明出来るような一步進んだ創造的な取組みの努力が望まれる。優れた創造的な個人研究が育った京都大学の伝統をどのように大きく発展させて行くのかが楽しみである。

外部評価委員の氏名

岡田清孝博士（自然科学研究機構・基礎生物学研究所所長）

菅村和夫博士（東北大学大学院医学系研究科教授）

藤木幸夫博士（九州大学理学研究院教授）

三品昌美博士（東京大学大学院医学系研究科教授）

（50音順）